

◆東京工業学校時代◆

ともあれ、高力は9月に東京工業学校で染織工手に採用され、教育界に転じ、織物技術の教育にあたることになる。後に斯界の大家とまで称される高力直寛の再出発であった。教育界に身を転じた高力のその後の活躍は目覚ましい。織物産地の桐生や京都への出張、実情調査を行いながら明治26年9月には助教教授に就任、その後も横浜、福島、山形などへ出張、現地調査を行っているが、こういった実績が認められたのか、明治27年12月金沢出張の特命が下る。これは石川県金沢工業高校をどう強化するかで地元が紛糾、その解決の



東京職工学校

の校長就任について歓迎会が桐生館（カネキ旅館）で行われている。12月12日正式に校長となった高力は桐生に赴任した。桐生では織物学校の校長として、機業家にアドバイスを行うとともに、県立織物学校を廃し第八高等工業学校の創設に向けての創立委員も務めている。

大正2年3月群馬県立織物学校廃校により校長を辞任。東京に戻り、その後は農商務省より東京大正博覧会審査官に任命されたりと、多忙な日々を送っていたが、その頃京都では染織学校の再編強化が大きな問題となっており、これらに対応できる指導者が求められていた。

その京都があらたな指導者として選んだのが高力直寛であった。大正6年5月21日、京都市染織学校校長に就任するとともに、6月5日には京都市染織試験場の初代場長にも就任し、熱い期待を浴びて京都入りした。高力の発言は京都ではかなりの重みがあり、染織学校改編は京都市立工業学校として決着し、志望者も増加、学校の基盤を固めた。また高力は試験場の技術指導を通して西陣機業の強化にも努めている。

◆晩年の高力◆

大正10年10月、高力は福井県絹織物

ために文部省より派遣されたものであった。高力はこの務めを無事果たすと、教育界での地歩を固め29年2月東京高等学校染織工科機織工場長就任、31年には欧州への3ヵ年留学が決まる。

『桐生市史』などでは、これを明治29年としているが、30年10月初旬に高力の海外留学送別会が連続して開催されており、欧州への出発は10月21日であった。この留学にあたり、高力は家族を郷土の屋代氏のもとに預けている。妻ブンにとっては久しぶりの松山生活であるとともに、子供達にとっては初めての父の故郷松山での生活であった。仙台まで汽車を利用し、人力車で峠を越え、舟で川を下って山形に入りそれから松山への行程は、子供達には初めての「旅行」であった。

◆海外留学と工業学校教授◆

欧州での高力は、最初の半年はフランス語の習得からはじめなければならなかった。トルコアン市の工業学校で織物研究に従事できるようになったのは明治31年の9月からである。その後フランスやベルギーの学校や工場に入り紡績や仕上の研修・修業を受けている。またこの間私費で各地を回り技術習得にも努めている。

帰国直前の明治34年5月10日、東京工業学校は東京高等工業学校と改称し



大正期の京都染織試験場

同業組合の35周年記念式典に来賓兼羽二重功労者として出席し、組合から表彰を受けている。賞状には、「明治二十年輸出羽二重創始ノ講師トシテ来県セラレ市内毛矢町織工会社内ニ於テ三週間従業者ニ対シ熟達セル技術ノ伝習ヲ為スコト頗フル懇切ヲ極ム其ノ効果空シカラズ本県斯業開発ノ基礎全ク成リシハ実ニ氏ノ奮勉努力与リテ力有トス」と記されている。

大正13年3月に京都市染織学校校長を、5月には京都市染織試験場場長も退任し一切の公職から引退、上賀茂に自宅を新築し、園芸など趣味の生活を送りながら京都織物業野工場顧問に就任、市の自治団体各種世話役なども務



高力直寛編著「織物集覧」

5月30日高力は無事留学を終え帰国するが、帰国に先立ちブンは母と子供達を連れ松山を出発、家族を桐生の森山家に預け、貸家探しを行い、本郷駒込に新築貸家を賃貸契約し、一家揃って高力を迎えた。

帰国後の高力は、講義でフランス語のノートを使用していたことが、当時生徒の一人であり後に山形大学学長を務める森平三郎の証言にある。おそらく留学時に書き留めたノートであろう。明治34年8月14日に高力は東京高等工業学校教授に昇格、合わせて10月21日には染織科機織分科長となり、名実ともにこの分野での第一人者となる。35年9月には福井市で開催された第7回北陸地区実業大会には来賓として



京都時代の高力直寛

昭和11年の初夏、高力は顧問先京都織物の工場内で激痛のあまり倒れた。暫く自宅療養した後の8月15日市立病院に入院、胃の手術を受ける。一旦退院するも、翌年再発し、6月11日死没した。享年73歳、胃癌であった。葬儀は6月13日午後2時より知恩院先求院で京都織物の準社葬として執り行われ、多くの関係者が参列しその死を悼んだ。

—エピソード—

昭和20年6月18日未明、米軍のB29爆撃機89機が四日市を急襲した。焼夷弾11、272個が市街地に投下され、多くの死傷者を出し、市街地は壊滅状態に追い込まれた。

夫の死後、ブンは京都を離れ、この頃四日市に居住していた。3人の男子に先立たれ、末子を戦争に取られ、時



晩年の高力一家

折訪ねてくる高力の弟子達との思い出話を何よりの楽しみとしていたブンは、戦局の悪化とともに夫の遺品を庭の土中に埋め、何とか護りたいと考えていたが、爆撃のすさまじさはブンの願いを空しいものにしたのである。明治から大正、そして昭和初期にかけての高力の資料とノートは、この時灰燼に帰した。それは日本の機業史を辿るうえにも大きな損失であった。

*本稿の記載内容は「桐生織物史」「桐生市史」など既存の資料と相違していません。森山芳平とその業績については亀田光三「桐生織物と森山芳平」（平成13年、みやま文庫）に詳記されています。（文責／福井商工会議所 奥山秀範）